

「専修基礎ゼミ：高畑町界限」の実践と意義

－奈良教育大学社会科教育専修における初年次教育の一例として－

岩本廣美

(奈良教育大学 社会科教育講座 (社会科教育))

Educational Design for Field Work in Neighborhoods : A Reflection on a Freshman Seminar for Social Studies Majors

Hiromi IWAMOTO

(Department of Social Studies, Nara University of Education)

要旨：本報告は、奈良教育大学における2012（平成24）年度後期開講の社会科教育専修初年次学生対象「専修基礎ゼミ」の前半部分に関して、授業実践の背景、目的、経過、意義を具体的に述べたものである。授業目的は「社会科に関する問題発見力・企画力・資料収集能力・観察力・資料整理能力・表現力・人間関係調整力など教員をめざす学生にとって必要な資質の伸長を図る」こととした。目的達成のための内容構成は、地域資源を活用し、テーマを「発見・高畑町界限」としたうえで、本学近辺地域のフィールドワークおよび学生のグループ活動を中心に展開していった。その結果、地域資源の活用およびグループ活動については、意義のあることが確認できたが、社会科教育専修学生の学びの質的側面に関しては課題が残ったことも明らかとなった。

キーワード：初年次教育 educational program for freshmen、地域資源 regional resources for education、フィールドワーク field work in neighborhoods、グループ活動 group activities

1. 問題の所在

日本では、1990年代以降、大学の学部教育における初年次教育への関心が高まっていった¹⁾。奈良教育大学（以下「本学」と記す）においても、1999（平成11）年度の学部教育組織改革（以下「改組」と記す）を契機に、学校教育教員養成課程学生の初年次に履修させる学校教育基礎科目として、従前からの「日本国憲法」のほかに「基礎ゼミⅠ」（2単位）および「基礎ゼミⅡ」（2単位）などの諸科目を教育課程に位置付け、初年次教育に本格的に取り組んでいった。これらへの取り組み状況は、2006（平成18）年に本学が刊行した特色G P報告書に具体的に報告されている²⁾。

本学では、その後さらに改組を検討し、2012（平成24）年度の学部入学者に関しては、1999（平成11）年度の改組以来設置されていた総合教育課程³⁾を廃止し、学校教育教員養成課程に一本化することに伴い、初年次教育の科目構成などの見直しを図った。これまでの「基礎ゼミⅠ」および「基礎ゼミⅡ」を廃止し、前期に「大学での学び入門」（1単位）、後期に「専修基礎ゼミ」（2単位）を新たに設置した。これらはい

ずれも専修専門科目に位置付け、専修ごとに初年次教育に取り組んでいく方針を採った。「基礎ゼミⅡ」は、2005（平成17）年度まではコースごとに指導してきたものの、それ以降は専修ごとに指導してきた経緯がある。新たに設置した「専修基礎ゼミ」は、事実上「基礎ゼミⅡ」を名称変更させたものであるともいえよう。なお、これらの変更と並行して、教職専門科目に、従前からの「現代教師論」（後期、2単位）に加えて、前期開講の「教職入門」（1単位）を配置したのも、2012（平成24）年度改組の一環といえよう。

筆者は、社会科教育専修内の授業分担体制の一環で、2012（平成24）年度後期、新たに設置された「専修基礎ゼミ」の担当者のひとりとなった。後期授業開始直前にシラバスを具体的に再検討する過程で「専修基礎ゼミ」の設置意図や授業目的などに関する全学共通の明文化されたものがないことを確認した⁴⁾。こうした状況を勘案し、本報告は、社会科教育専修の学生を対象とした「専修基礎ゼミ」（以下「本授業」と記す）の目的、指導実践経過、意義を述べようとするものであり、合わせて、「専修基礎ゼミ」のあり方に関する議論のための基礎資料を提供しようとするものである。

2012（平成24）年度後期の本授業は、前半の10、11月を筆者（社会科教育学）が、後半の12～2月を佐野誠（法学）が、それぞれ担当する計画とした。本報告で取り上げるのは、筆者が担当する前半の部分である。前半と後半は、それぞれ完結させる計画としたため、本報告の取りまとめも筆者の責任において行った。

授業実践の対象となった学生は、2012（平成24）年4月に入学した教科教育専攻社会科教育専修の初等教育履修分野および中等教育履修分野の初年次学生で、合計29名である。同専修に入学した学生全員が、後期の授業に実質的に参加している状況が見られた。

2. 授業実践意図と計画

2. 1. 「専修基礎ゼミ」の目的と計画

2012（平成24）年度の本授業の目的は、年度当初に学生に配布された冊子『授業計画』では、次のように記載されている。「・大学における“知”の探求のための基本的姿勢を身に付け、レポートの書き方やネットの操作・問題点など“知の技術”を習得する。・担当教員の定めるテーマについて、演習方式で主体的に取り組み、相互に議論し批判し合い、テーマについての理解を深める。」しかし、具体的内容については担当教員に完全に委ねられた形になっている。そのため、2012（平成24）年度後期開始前に、シラバスを再検討し、本授業の目的を次のように設定したうえで、受講学生に初回（10月9日）授業で提示した。

「社会科に関する問題発見力・企画力・資料収集能力・観察力・資料整理能力・表現力・人間関係調整力など教員をめざす学生にとって必要な資質の伸長を図る。」

目的提示と同時に、筆者が担当する10、11月の授業で学生が取り組む活動のテーマを「発見・高畑町界限」とし、概要を次のように示した。

「県外・遠方から高畑町界限に来訪する中学生に、この地域の学習資源を紹介する想定で、テーマ設定・調査・とりまとめ・発表などの活動に、グループで協力しながら取り組む。」

火曜日7・8時限に開講の10、11月（8回分）の授業実践計画は、次のように学生に提示した。

- 10月9日 ①オリエンテーション
 16日 ②高畑町界限フィールドワーク（担当者主導）、グループづくり
 23日 ③各グループからのテーマ案報告、資料収集・調査計画作成
 30日 ④資料収集（現地での活動も含む）
 11月6日 ⑤資料収集・続き
 13日 ⑥発表準備（パワーポイント作成）
 20日 ⑦発表・前半（全グループ準備完了）
 27日 ⑧発表・後半

①から⑧までの授業実践計画の順序を、受講する学生の活動として示すと、初回（①）での受講目的および計画概要の理解の後、以下の（1）～（8）のような流れをたどることになる。＝に続く番号などは、上記の授業日程と対応するものである。

- （1）地域資源の概要把握（フィールドワーク）＝②
 （2）活動するグループづくり＝③
 （3）調査テーマの検討・決定＝③
 （4）調査・資料収集、取りまとめの計画作成＝③
 （5）調査・資料収集の実行＝④⑤
 （6）発表準備（パワーポイント作成）＝⑥
 （7）発表、他グループの発表視聴、質疑＝⑦⑧
 （8）レポート作成＝授業時間外

（1）～（8）の流れを授業形態として見ると、（1）は担当者主導の全体授業である。（2）～（6）はグループ活動である。（7）は全体授業であるが各グループの発表から構成される。（8）は、学生個々の取り組みであり、授業時間外の復習に相当する。また、授業担当の筆者が主導するのは、（1）だけで、（2）～（8）は、学生の主体的取り組みを中心とした。この間の担当者の仕事は、課題設定、方向付け、調整などが中心であり、講義はほとんど行わない計画である。これは、本授業実践計画の特徴的な部分のひとつである。

2. 2. 地域資源「高畑町界限」について

本授業の特徴は、学生の主体的取り組みが中心であることのほかにもうひとつあり、それはテーマを「発見・高畑町界限」とし、本学近辺の地域資源を活用することにあった。ここでいう地域資源とは、本学の立地する奈良市高畑町に存在する各種の文化財および関連事項のことである。

奈良市旧市街地周辺に位置する高畑町は、春日大社や東大寺などの「古都奈良の文化財」として世界文化遺産に登録⁵⁾された文化財が分布する地域（広義の奈良公園）の南側一帯に広がり、現在は主として住宅地となっている地域である。高畑町の一角を占める本学北側付近には、奈良時代創建の新薬師寺のほかいくつもの寺院や神社があるほか、入江泰吉記念奈良市写真美術館（以下「奈良市写真美術館」と記す）、志賀直哉旧居といった近現代の文化遺産など、多様性に富んだ地域資源が見られる。また、本学北側付近を東西に延びる旧柳生街道沿道は、奈良市が1994（平成6）年に奈良町都市景観形成地区に指定した範囲の一部分になっており、歴史的町並みの保全が図られている⁶⁾。さらに、本学キャンパス内の北辺部には、吉備塚、新薬師寺金堂跡など古墳時代及び奈良時代の歴史的遺構のほか、第二次大戦前の旧陸軍38連隊に由来する倉庫跡（現在の教育資料館）のように近代の文化遺産も存在し、地域資源の性格として見れば、本学北側付近と

の連続性が見られる。

受講する学生の大半は、入学後これらの地域資源に接する機会がほとんどないままに推移してきたものと予測された。これが、テーマを「発見・高畑町界限」とした理由である。また、高畑町の地域資源の代表的存在といえる新薬師寺まで本学から徒歩10分ていどで到達できるため、90分という授業時間内で高畑町付近の観察ができるという地理的条件も考慮した。すなわち、学生にとって距離的には至近の範囲内にありながら、これまで見落としていたものを発見させることが筆者の意図であった。

3. 授業実践の経過

3. 1. 前半の全体授業

ここでは、10月9日に実施した①オリエンテーションと10月16日に実施した②高畑町界限フィールドワークの経過を述べる。

初回授業①では、後半の佐野誠も含めて担当者の自己紹介、出欠確認の後、本授業の目的、学生の活動の概要のほか、評価の方法⁷⁾についても説明をした。その後、学生を教室（講義棟105教室）から戸外に連れ出し、本学キャンパス内の北辺部を徒歩で移動しながら、新薬師寺金堂跡、教育資料館、吉備塚の順に案内して、それぞれの歴史的遺構や文化財の概要および背景などを現地で説明をした。短時間のフィールドワークを実施したことになるが、意図は、次回（10月16日）の授業で、初回授業の2倍以上の距離を徒歩で移動することを考慮し、学生に事前の心構えや準備をさせることにあった。

2回目②では、教室に集合させ、出欠確認後ただちに学生を戸外に連れ出し、下記1～8（図1）の順序で案内をして、地域資源のそれぞれについて現地で概要説明を行った。また、これらの地域資源から各グループで取り組む調査のためのテーマあるいは題材を選択する旨の予告をした。

- 1 奈良市写真美術館
- 2 鏡神社
- 3 新薬師寺
- 4 不空院
- 5 まちかど博物館・彫刻工房奥田龍王
- 6 都市景観形成指定建築物・やきもの工房日々器
- 7 志賀直哉旧居
- 8 登録有形文化財・中村家住宅

②では、教室から現地に出発する前に、学生ひとりひとりに、A4サイズのワークシートを1枚配布し、授業時間中に観察したそれぞれの資源の名称および関連事実などを記述するよう求めた。また、高畑町界限を歩いた後の全体的所見も記述するよう求めた。フィールドワーク終了後は大学に戻り解散したが、このワークシートは、解散直前に回収した。

3. 2. グループ活動

ここでは、10月23日に実施した③各グループからのテーマ案報告、資料収集・調査計画作成、その後の④資料収集（現地での活動も含む）、⑤資料収集・続き、⑥発表準備（パワーポイント作成）の経過を述べる。毎回の授業では、最初に全員を教室に集合させ、出欠確認、その日の活動内容の確認の後、グループごとにその日の活動に移行させていった。活動内容によって

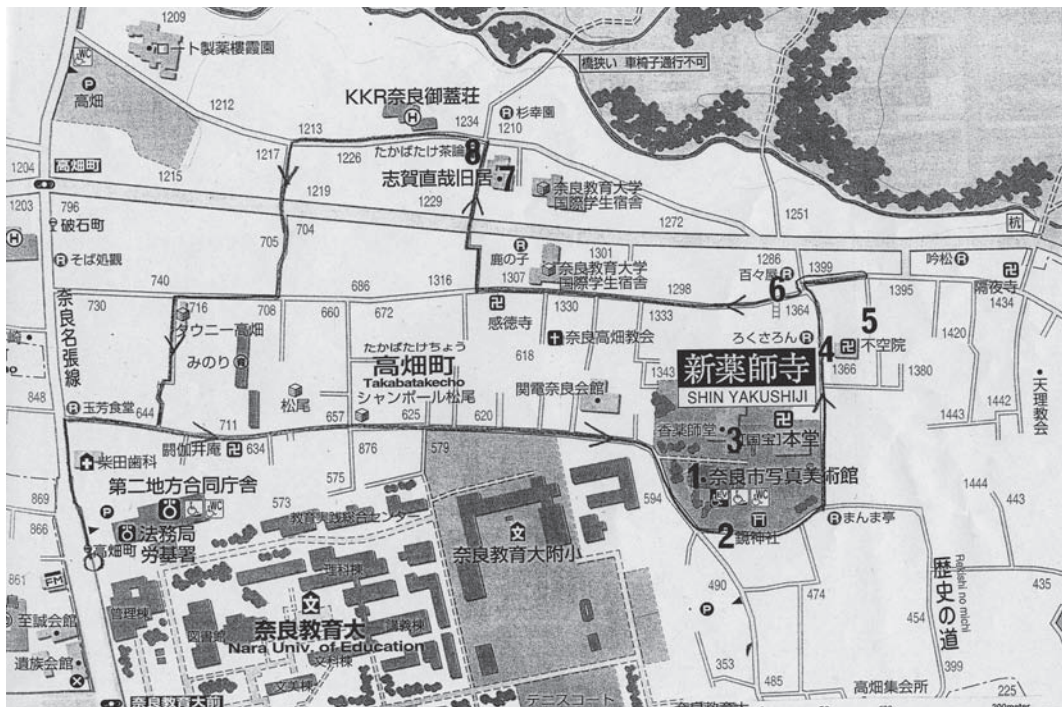


図1. 「高畑町界限」で観察した文化財（昭文社「奈良中心図」2010年をもとに筆者編図）

は、教室から離れて、高畑町現地での観察、図書館での資料検索、パソコンルームでのパソコン操作など、教室外での活動も見られた。

③では、学生にまず、グループづくりをさせ、その後、グループごとにテーマ検討→資料収集・調査計画の作成に取り組ませた。

グループづくりは、連携の取りやすい学生同士2名以上最大4名でひとつのグループをつくるよう指示し、原則として学生に委ねた結果、学生は計10グループに分れた⁸⁾。

次に、各グループでテーマを検討させた。検討したテーマは発表させ、重複が最小限に止まるよう筆者が多少の働きかけを行った。学生が選択・設定したテーマは、次のとおりである。

- ア. 新薬師寺について
- イ. 鏡神社
- ウ. 高畑町界隈の歴史を巡る－不空院－
- エ. Are You 不空院？
- オ. 吉備塚古墳
- カ. 入江泰吉と奈良市写真美術館
- キ. 都市景観形成指定建築物
- ク. 文化財と風景の融合
- ケ. 志賀直哉旧居
- コ. 中村家住宅

各グループの選択したテーマは、前述した1～8の地域資源とおおよそ対応する結果となったが、次の3点は予想とやや異なった点であった。

- ・不空院は2グループが選択したこと（ウ、エ）
- ・吉備塚は本学キャンパス内から選択された題材であること（オ）
- ・まちかど博物館・彫刻工房奥田龍王が選択されなかった

これらのテーマに沿って各グループは、④⑤資料収集、⑥発表準備（パワーポイント作成）へと進んでいった。

3. 3. 発表会

11月20日（⑦）、11月26日（⑧）の授業は、教室で発表会を実施した。発表は、パワーポイントを再生しながら行うよう、計画段階で提示していた。パワーポイント作成に当たって、データのコマ数は、2名グループ12コマ、3名グループ16コマ、4名グループ20コマを、それぞれ上限とした。また、パワーポイント作成に当たって、写真や図などを適宜織り込むよう示唆したが、具体的なまとめ方は各グループに委ねた。

発表時間は、2名グループ12分、3名グループ16分、4名グループ20分をそれぞれ上限とした。また、発表では、グループを構成する全学生が必ず話をすることも条件とした。

発表は、11月20日（⑦）に前述のア～エの4グルー

プが、11月26日（⑧）にオ～コの6グループが、それぞれ行うように配置し、各グループの学生に教室の前に立ってもらい、発表させた。また、⑦⑧の授業前に、「専修基礎ゼミプレゼンコメントシート」を全学生に筆者が配布し、発表を聞く学生には、発表テーマおよび発表への所見を記述するよう求めた。

3. 4. 授業実践への学生の反応

11月26日（⑧）の授業では、最後の10分ていどの時間を用いて、前半の授業に関するアンケート調査を実施した。本学のFD委員会が実施しているアンケート調査とは別に、筆者が授業形態に合わせて独自に調査票を作成し、実施した。出席者28名に配布し、26名から回答が得られた。7問から構成した各設問および各選択肢への回答数は次のとおりである。設問には下線を付した。

問1. 高畑町界隈の文化財など大学近辺の地域資源を学習素材にしたことに興味を持ちましたか。

- ア. 興味を持った (13)
- イ. 比較的興味を持った (12)
- ウ. あまり興味を持たなかった (1)
- エ. 興味を持たなかった (0)

問2. 初回で大学構内を、2回目で高畑町界隈を観望したことについてどう思いましたか。

- ア. 楽しかった (13)
- イ. 比較的楽しかった (10)
- ウ. あまり楽しくなかった (2)
- エ. ただ歩いているだけだった (1)

問3. グループで話し合っってひとつのテーマ（題材）を選択し、その後グループで協力して調べたり、まとめたりしたことについてどう思いましたか。

- ア. テーマにはグループ内の全員が納得し、協力して取り組んだ (16)
- イ. テーマにはグループ内の全員がまずまず納得し、比較的協力して取り組んだ (10)
- ウ. 納得していない人もいたが、全員で協力することができた。 (0)
- エ. 納得しなかった人はあまり協力しなかった (0)

問4. 4～6回目はグループ活動になりましたが、あなたは授業に専念する（調べ活動やパワーポイント作成のための活動などに取り組む）ことができましたか。

- ア. 授業に専念した (9)
- イ. 授業に比較的専念した (16)
- ウ. 授業とは関係ないこともしていた (1)
- エ. 授業に関係ないことばかりしていた (0)

問5. 授業の7、8回目は発表会でしたが、他のグループの発表を視聴して関心を持ちましたか。

- ア. 関心を持った (12)

- イ. 比較的関心を持った (10)
 ウ. グループによっては関心を持った (4)
 エ. ほとんど関心を持たなかった (0)

問6. 授業目的は「社会科に関する問題発見力・企画力・資料収集能力・観察力・資料整理能力・表現力・人間関係調整力など教員をめざす学生にとって必要な資質の伸長を図る」ことでしたが、目的を達成することはできたと思いましたか。

- ア. 達成できた (8)
 イ. 比較的達成できた (15)
 ウ. あまり達成できなかった (3)
 エ. まったく達成できなかった (0)

問7. 前半の授業に対するあなたの総合的な満足度はどうですか。

- ア. 満足 (10)
 イ. 比較的満足 (10)
 ウ. 普通 (5)
 エ. やや不満 (0)
 オ. 不満 (1)

4. 実践の意義

4. 1. 地域資源の活用とフィールドワーク

本授業実践の特徴のひとつは、本学から至近距離にありながら多くの学生が日頃見落としていると想定した地域資源を活用したことであった。

10月16日に実施した授業②高畑町界限フィールドワークの最後に学生がワークシートに記述した所見には、学生が見落としていたことを自覚したと思われるものやさらにフィールドワークを深めてみたいというものや数多く見られた。代表的な記述を次に2名分挙げる。

- ・通学時は、奈良町のほうが中心なので、大学の裏側などこれまで知らなかった歴史的な建物や彫刻工房など多くのことを学ぶことができた。個人的には、気になった寺や店などもいくつかあったので、また時間があれば、行ってみたいと思った。
- ・半年も大学に通っているので、ほとんどの場所は知っているだろうと思っていたが、まだまだ知らないことがたくさんあった。大学の周りには、たくさんの美術館や博物館があることがわかったので、大学生活の中で一度は行ってみたいと思います。

前述のアンケート調査の問1は、「高畑町界限」という地域資源に関心を持ったかどうかを改めて確認しようとしたものであった。結果は、「ア. 興味を持った」および「イ. 比較的興味を持った」でほとんどの回答が占められ、本授業で、学生は地域資源に関心を持ちながら学習を進めたことがうかがえる。

アンケート調査の問2は、10月16日に実施した授業②高畑町界限フィールドワークの感想を回答させたも

のであるが、これについても、26名中23名は「ア. 楽しかった」または「イ. 比較的楽しかった」を選択しており、フィールドワークの活動自体も概ね支持されたことがわかる。

4. 2. 学生のグループ活動

本授業実践の特徴として、学生の主体的活動を中心に展開したことも挙げられるが、形態的には、学生のグループ活動を中心としたことであった。

筆者は、計画に当たって、学生のグループ活動には長所と短所があると想定していた。長所として、グループを構成する学生同士が協力することによって、学習成果が共有されるだけでなく、個々の学生の思考も深まることを期待した。発表をグループごとに行わせることで、個別発表と比較すれば時間短縮を図ることができるという便宜的側面もあると思われる。短所は、調査テーマを設定する過程で、学生によっては必ずしも関心のないテーマで取り組むことになることのほか、個別評価が曖昧になることであると想定した。

短所のうち、個別評価が曖昧になることは、成績評価の観点から見ると、看過できない点である。そのため筆者は、発表時に全学生が発言を行うことを課したほか、学生が個別に作成するレポートの配点を50%としたことで、曖昧になることをできるだけ避けられるように考慮した。

アンケート調査の問3は、筆者がグループ活動の長所または短所と想定したことを、学生がどのように捉えていたかを尋ねたものであった。結果は、過半数の学生が「ア. テーマにはグループ内の全員が納得し、協力して取り組んだ」の回答を選択し、残りの学生の回答もこれに準ずるものであった。本授業実践に関する限り、筆者がグループ活動の短所と想定したことは、学生にとってはほとんど問題にならなかったことが明らかとなった。また、グループ活動の長所である学生同士の協力が実現されていたことにもなる。

4. 3. 社会科教育専修学生にとっての学びの質

地域資源としての文化財を授業で取り上げること自体、社会科教育専修の学生にとって意義のあることであろう。このことは、10月16日に実施した授業②高畑町界限フィールドワーク後に学生が記入した所見にも表れていた。しかし、本授業実践における学生の学びの質については、改めて確認する必要がある。そこで、アンケート調査の問6では、初回授業で提示した本授業の目的を学生に振り返らせる設問とした。

結果は、過半数が、「ア. 達成できた」または「イ. 比較的達成できた」を選択しており、学生の捉え方としては、授業目的が概ね達成できていたことがうかがえる。しかし、筆者からみると、学生の学びの質的過程と密接に関係するはずの文献資料の扱い方、イン

ターネット検索の際の留意点など具体的な面については、必ずしも達成できたようには見えない。たとえば、作成したパワーポイントデータ上に、事実関係を記述するのに用いた文献やインターネット情報など出典を明記した例は、10グループのうち2グループだけであり、口頭で紹介したグループを含めても5グループに止まった。結果として、パワーポイント作成前に、出典を明記することを学生に留意点として改めて確認すべきであったことになる。こうした点は今後の授業で繰り返し再確認する必要があることも確かであろう。

5. 授業実践の成果と課題

社会科教育専修初年次学生対象の「専修基礎ゼミ」のテーマを「発見・高畑町界限」とし、地域資源の活用と学生のグループ活動を中心に展開した本授業実践は、これまで述べてきたことから、学生が概ね支持したことが明らかである。しかし、アンケート調査の問7で、本授業に対する総合的な満足度を尋ねた結果は、「ア. 満足」または「イ. 比較的満足」と回答した学生が26名中20名に止まり、6名は満足しなかったことも明らかである。とくに、「オ. 不満」という回答した者も1名おり、そのほかに、欠席者や調査票を提出しなかった者もいたことから、数名に関しては何らかの課題が残ったといえよう。

最後に、本授業実践の一般化がどこまで可能かについて述べておきたい。まず、社会科教育専修の学生向け「専修基礎ゼミ」のあり方を考えていくうえでは、本授業実践で提示した目的は共有される可能性があると思われる。ただし、社会科教育専修の担当教員はそれぞれ専門性が異なるため、目的達成のための授業内容については、毎年度の担当者ごとに検討されることになる。しかし、内容は別としても、グループ活動については、関心を持つ教員により導入が検討されてよい。次に、「高畑町界限」という地域資源を授業で取り上げることは、社会科教育以外の専修でも意義を見いだせるように思われる。たとえば、新薬師寺内の仏像群は美術史上で、志賀直哉旧居は文学史上で、それぞれ重要な資源のはずである。ほかにも、「高畑町界限」の地域資源は、多様な見方や扱い方が可能であろう。これらの延長で、専修の枠を超えた「専修基礎ゼミ」のあり方が検討されてもよいかもしれない。筆者ばかりでなく、これらは、本学にとっての今後の課題とすべきことであろう。

付記

本授業実践を遂行するに当たり、「高畑町界限」の関係者の方々に多大な便宜を図っていただいた。この場を借りて、感謝申し上げたい。

注および文献

- 1) 山田礼子、2004年、学生サービスと一年次教育、館昭・岩永雅也編著『岐路に立つ大学』放送大学教育振興会、155～164ページ。山田は、「一年次教育」の語を用いている。
- 2) 奈良教育大学、2006年、『現代的課題に対応する導入教育科目群の展開－「考える力」「表す力」の育成を目指した教育者育成－実施報告書』、161ページ。
- 3) 本学は、1995年度改組で初めていわゆる「ゼロ免」課程の総合文化科学課程を立ち上げたが、1999年度改組で総合教育課程に再編し、2011年度まで推移した。
- 4) 従前からの「基礎ゼミⅡ」に関しては、1999（平成11）年度の本学『履修の手引』に「1回生後期に展開する授業で、各コース担当の専門教員がオムニバス方式によりそれぞれの専門分野の講義を行うとともに、後半では、2回生からの履修分野決定の希望調査等を行います。」と記載されている。「基礎ゼミⅡ」は、当初から内容に関する目的は曖昧だったことが読み取れる。
- 5) 大蔵省印刷局、1998年、『木の国 日本の世界遺産 古都奈良』63ページ。
- 6) 奈良市のホームページによる。最終検索日：2012（平成24）年12月4日。
- 7) 授業への取り組み50%、レポート50%と提示した。
- 8) グループづくりに関してはできるだけ筆者が立ち入らないつもりでいたが、結果的にひとつのグループに関しては筆者が指導をした。